

9 登り窯が五条坂の明日を動かす

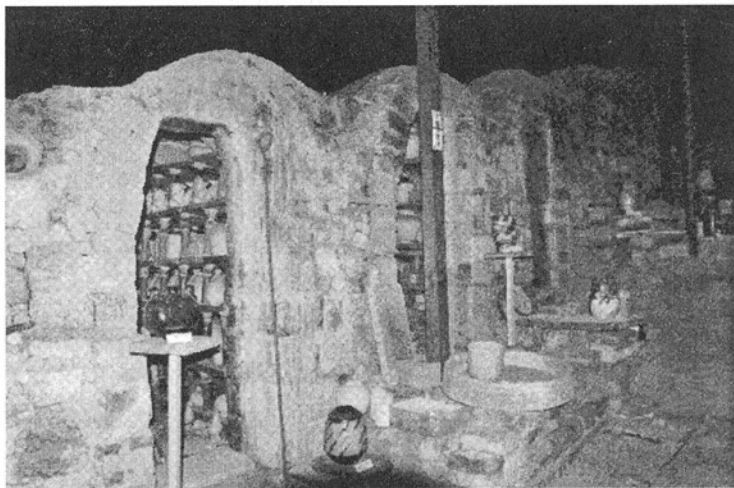
赤尾舞

はじめに

本書を手にとって、少しでも登り窯に興味を持たれたなら、すぐに登り窯を見に行ってもらいたい。そうすれば、これから紹介する人々の思いと活動について、より理解を深めていただけるだろう。登り窯の放つ力を直に感じるのが、登り窯、そして五条坂の未来への一歩なのだ。

I 奇跡の窯

東山五条から西北に伸びた路地を少し歩いたところに、とある陶芸会社の工場がある。工場の中に入れば、そこには別世界が広がっている。9室からなる登り窯が静かに、そして威厳たっぷりに横たわっている。トタン屋根からはうっすらと太陽の光が差し込み、その大きな体のところどころに輝きを与えているのが美しい。ここで文化の営みが行われてきた、そんな力強さがここには宿っている。いくら見ても、見飽きることはなく、吸い込まれてしまいそうな恐ろしさすら感じる。



五条坂・藤平陶芸に残された登り窯

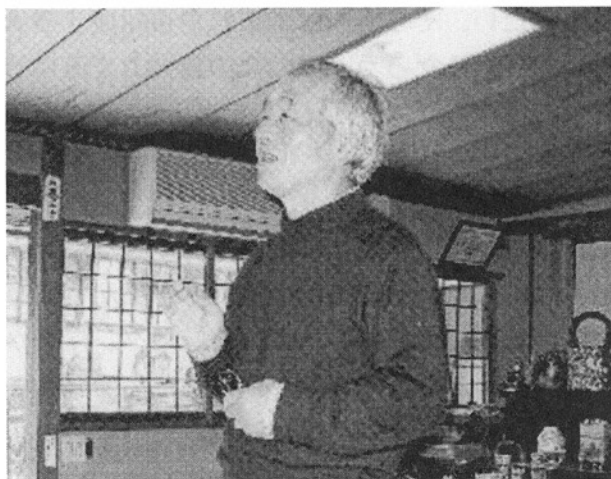
この登り窯は、藤平陶芸有限会社が所有している。窯の歴史は古い。明治 27、8 年前に築かれたものだと言われている。当時は、藤平陶芸の所有ではなく、京都陶磁器合資会社という、上絵付け用の生地工場の所有であった。藤平陶芸の所有になったのは、第二次世界大戦中の昭和 17 年のことだ。最初は土地を借りていただけだったが、最終的に買い取ることになった。

五条坂にはかつて十数基の登り窯があり、それらは、町中が真っ黒になってしまうほどの煙を吐きながら、いくつもの陶器を焼き上げていた。しかし、昭和 46 年に大気汚染防止条例が制定されたことにより、五条坂の登り窯は使用停止を余儀なくされる。もちろん、陶磁器関係者たちは反対したが、時代の流れには逆らえなかった。電気窯の普及も進み、それ以降、登り窯は次々と姿を消してしまう。現在では数えるほどしか残っていない。使われていた当時の姿のままで残されている登り窯となると、藤平の登り窯と河合窯くらい

だ。しかし、河合寛次郎記念館で見ることができる窯は、当時の雰囲気までは保存されなかった。整えられていて、それはもちろん美しくもあるのだが、ただの置物のように見えてしまうのだ。

藤平の登り窯は、辺りに土のにおいが漂い、当時使用されていた道具やら焼きかけの器やらが雑然と並べられている。まるで、現在もここで作業が行われているかのようだ。この窯が持つ最大の魅力は、窯焚き師が汗を流し、職人が陶器を並べた栈板を運び、大人から子供までが作品の完成を祈るような気持ちで見つめている、そんな風景を容易に想像させてくれることである。

登り窯を墓だと言う人もいる。もう焚くことができない窯に用はない、と。しかし、私はそうは思わない。この登り窯はまだ生きている。私たちに何かを訴えかけている。そして、実際に、その訴えに耳を傾け、行動を起こしている人たちがいる。彼らは、登り窯は本来の役割は終えてしまったが、新たな役割があるはずだと信じている。登り窯が五条坂を動かそうとしているのだ。



工房にて学生に講演する藤平陶芸社長 末弘直道氏

Ⅱ 残すこと、活かすこと

そもそも、どうして、藤平の登り窯だけがこのような姿で今日まで残されているのか。藤平陶芸の3代目である末弘直道社長はこのように推測する。

「そのとき残した明確な理由っていうのは分からないですけど、当事者自体だって、これをこういう目的で残そうとか、そういうはっきりした理由があって残したわけじゃないと思います。月にいっぺん焚いてたんですが、窯というものは、陶器を作る仕事にたずさわる者にとっては一番大切な工程ですわねえ。一番大切な、一番思いのこもったプロセスですから。で、それをする場所を取り壊してしまうということに対しては心理的な抵抗、忍びないっていう気持ちが非常に強かったんじゃないでしょうかねえ。

私は昭和52年にここに来たんですが、このまま残しておきたいという気持ちが強かったですから。漠然と、やっぱり非常に貴重な遺物であるっていう思いがありましたねえ。先代も、潰さなくてはならないかも分かんないという思いはあったかもしれませんが、潰そうとかそういうことを言うたこともありませんでした。小さい会社でも、その歴史を象徴するようなもんですから、忍びないという思いが強くなって、それがいつまでも残ってて。それと、場所的に言うても、これをこのまま置いておいても、十分に生産の規模、工場として機能し得るスペースがあったことが、やっぱり大きな原因でしょうね。これを潰して、そこへ新たな窯を作らないと場所が無いところが他は多いと思います。他は小さいところでやっていらっしやるところが多いから。」(注1)

工場をのぞかせてもらえば分かるが、現在の工場は、煙突部分を含むと20メートル近くある登り窯の横に、電気窯や作業スペースがある。なんとも不思議な光景ではあるが、

このような歴史と文化が詰まった窯の横で、作業ができるとは、陶工たちにとっては非常に幸せなことではないだろうか。

十分なスペースと所有者の窯に対する強い思いとがあり、ここまで残されてきた藤平の登り窯であるが、危機的な状況にも何度も立たされてきた。

「ただあるだけで、人がたまに来たら見せるくらいで。無用の長物で場所を食う、だから早く潰してしまおうということを、うちの工場の一部の人も言ってましたね。場所に対しては固定資産税がかかるわけですからねえ。

平成4、5年頃から、必要な従業員を維持しつつ、運営できるだけの売り上げが上がらない。がたん、がたん、がたと音を立てて年々売り上げが落ちてくるというような状態でしたから。やっぱり土地も一部処分しなければならぬんじゃないか。ひょっとしたら、窯もですね、したくないけれど処分しなければならぬような状態でした。」(注1)

末広社長は、昭和52年に副社長として藤平陶芸にやってきた。先代の藤平長一氏には息子がいなかったため、その娘の夫である末広社長が藤平陶芸を継ぐことになったのだ。

「大阪の会社に勤めてましたが、しょっちゅう相談されることがあって、段々身近になってついに辞めてこっち来たんですけどね。」(注1)と笑うが、もともと陶磁器関係者でなかっただけに苦労も多かったことだろう。登り窯には、特に頭を悩ませてきたはずだ。京都市、あるいはどこかの大学が買い取ることができれば一番良いのだろうが、この不景気である。そううまくはいかない。

こうして、登り窯が「ただ残されている」だけの状態が長く続いた。しかし、残されているだけでは、いつか取り壊されてしまう。この登り窯を「活かす」ことを考えなければいけない。藤平の登り窯を保存するため、コンサルタントも何人が訪れ、さまざまな開発案が持ち寄せられたこともあった。しかし、どれも実現には至らなかった。そんな中、この登り窯に転機が訪れる。

Ⅲ 登り窯の保存と活用をめぐる

佐野春仁氏が相談を受けて藤平陶芸を訪れたのは、平成15年の春のことだ。とは言っても、佐野氏はコンサルタントではない。京都建築専門学校の教務主任である。これまで、教師、そして建築士として京町家の再生に携わってきた。佐野氏の大学時代の恩師が末広社長と友人であったことから、相談を持ちかけられたのである。

「一番感激された一人でしょうね、佐野先生が。」(注1)と、社長は言う。登り窯の魅力を最も理解している佐野氏の話のを伺うために、葭屋町にある町屋を訪ねた。その町屋は、京都建築専門学校が買い取り、学校の教師と生徒が一緒になって改修し、町屋校舎として再生したものである。かつての雰囲気はそのままに、耐震補強に力を入れたものだそうで、そうしてところからも佐野氏の考えを感じ取ることができる。

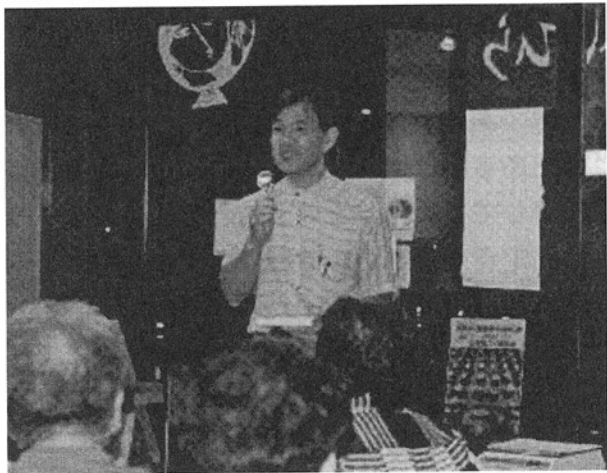
登り窯の素晴らしさについて、佐野氏は熱っぽく語ってくれた。

「あそこの何がいいかって言うとな、大正とか昭和の、やきものを作ってる工場がそのままあるわけですよ。要するに、全体があるでしょ、やきものもあるし、ろくろ窯もあるし。昔からのやつがすごくいい形で残ってる。これはもう、全体として生きてるミュージアム

ですよね。だから、この形そのもので残せる方法を考えよう、と。」(注2)

佐野氏は、あくまでも元々の形で残すことにこだわる。そして、登り窯だけでなく、空間そのもの大事だと主張する。

「僕らは、建築やってるときに一番大事だと思うんだよね、その場の持つるリアリティ、その場の持つる力ってのが。それをちゃんと見て、そして、それを整えてやる。自分たちで作る必要は無い。そういうのがやっぱり建築の基本ですよ。何も無いところはしょうがないから場に力を出すようにいろいろ庭だとか、木だとか植え込むわけだけど、すでに伝



藤平陶芸の催しで挨拶する佐野春仁氏

統的な雰囲気の中に満ちているんだったら、それを活かさない。みんなね、今はね、物ばかり見てる。」(注2)

そして、木製の机の上にあった湯呑をこつこつ叩きながら、こう説明した。

「だけど、人が物を感じられるためには、この置かれてる場って非常に大事でしょ。プラスチックに置かれてるのとさ、こういう洗いざらされた古材の上に置くのとね、全然違って見えるよね。ビロードの上に乘せるのと、女性の肌の上に乘せるのと、全然違うわけ。そういうことをもう少しわからないと。」(注2)

危機的状況にある登り窯とその空間を残すためには、そのための収益を得ること以上にもっと多くの人にその存在を知ってもらうということが必要だと佐野氏は考えた。そこで、佐野氏を中心に、平成15年年7月「登り窯を保存・活用する会」が発足され、五条坂の夏の風物詩である陶器まつりの時期に合わせ、登り窯の傍らでコンサートや講演会を開くなどといったユニークな催しが行われた。

「何かあそこでイベントをする、参加するっていうかね、ただボーっと見てるだけじゃ駄目でしょ。何かするってことで、もっともっとよく見れるでしょ。そういう意味で、あそこでアートをやるってのが一番良いんだよね。例えば、インスタレーション(仮設空間設置)をやってみるとか、展示会やってみるとか。コンサートやってもいいし、朗読会やってもいいし、なんかいろんなことやって、楽しんで。僕自身もそういうところ見てみたいっていうのあるね。だから、それは自分たちがそれ聴いてみたいと思ってるからやってる。それで、そのときに人が集まってきてくれて見てくれたらいい。」(注2)

登り窯とコンサート、何とも不思議な取り合わせである。しかし、登り窯を見ることを楽しんだら、次は、登り窯と何かを共有するということが必要なのかもしれない。ただ、講演会に参加して登り窯の知識を身につけるだけよりも、その後で、登り窯と一緒に音楽を楽しむ方が、登り窯をより身近に感じることができるし、はるかに魅力的なことではないだろうか。

そして、佐野氏は、登り窯を活用するうえで忘れてはならないことを話してくれた。

「登り窯をどう活用するかっていうことでね、例えば、非常に優秀なコーディネーターが、

プロデューサーが来てるわけ。あれが素晴らしいし、私も大好きだ、と。それで、ここにある程度観光客入れて、600坪を活かしきって、収益上げるためにいろんな事考えるんですね。そうすると登り窯をどうするかって言ったら、あれをガラスのショウケースに入れてね、そして周りにレストランとしてカクテルコースも入れてね、やきものをたくさん効果的に散らしてね、そういう魅力的な空間の中でワインを置いて。これはイメージできるよね。イメージできるけど、登り窯は一体何になるのって言ったら、見せ物になる。まあ、それも一つの使い方なんだけど、ちょっと違うんじゃないかなと思って。そうじゃなくて、あの登り窯が僕らにとって一番大事なのは何なのかって言ったら、あれを使っていた人間たちの心意気っていうか、エネルギー。それに僕らは奮い立たせられるんだよね。

登り窯そのものは芸術作品でもなんでも無い。道具なんですよ。だけど、道具だけど、あれがもう、もくもくと煙吐いて、炎が入って、あそこに何十人もいて窯を焚いてるっていう姿が彷彿とできるような場。そういうものは、ものを作ってく、特にやきものを作ってく人間にとって非常に大事なんじゃないかな。登り窯が持っていた一番の効用は何かって言うとな、祝祭性だと思うんだよね。京都は寄り合い窯が普通だったんだけど、その寄り合い窯ってのは、ライバルももちろん来るわけじゃない。焼く前から、普通にみんなばれちゃうわけ。焼いたやつはみんな見てるし。焼いてる間、みんな職人たちがわあわあしゃべるわけだから、それが結局大事な情報と社交の場だったんだよ。で、作家も来るし、作家の子供たちも来るわけ。みんな言ってるの、自分はちっちゃい時によく（登り窯に）連れてこられたって。そうすると、偉い先生とかにお前頑張れよとか言われるわけじゃない。あるいは職人の頭にね。それがやっぱり、ずっと大事に残るわけじゃない。そして、そこでの全体が集まって話をして、情報交換して顔合わせるって事が、物を作っている地域そのものの活力。ところがね、その後、登り窯ができなくなって、電気窯やガス窯になって、作家さんたちは自分の好き勝手に裏庭で焼けるようになった。てことは、もう顔合わせる必要ないわけ。こっそり自分で焼くんだよね。ていうことは、一個一個として失敗の無いものはできますけども、全体としての力はどんどん無くなって。切磋琢磨するところが無いから。やっぱり、人間たちが一つの共同の場所に来て、五条坂とか清水っていう地域に来て、みんなでわあわあやってやるときのエネルギーってさ、大きかったと思うよ。それを失ったのが一番大きいと思う。」（注2）

そう、かつて登り窯は地域の人々の交流の場であった。登り窯の傍らでイベントを開くことは、もう一度登り窯を交流の場として活用するという意味を持っている。

町屋などの建物であれば、人が住むという本来の役割を果たすことができる。それに比べ、登り窯はどんなに頑張っても、やきものを焼くという本来の役割はもはや果たすことができない。ただ、「人を集める」という、もう一つの重要な役割は果たすことはできる。陶工たちに欠かせない道具だったからこそ、人が集まってきた登り窯。そして、そんな力が今も宿っているからこそ、人を集めることができる現在の登り窯。時代の流れとともにその目的は変わったが、これで、藤平の登り窯は「ただ残されている」だけのものではなくなった。

IV 保存と活用 登り窯以外の事例から

ここで、「保存・活用」に求められることは何かを考えてみたい。そのために、登り窯と

は別の事例を取り上げてみよう。

1) 駒井邸の保存・活用の場合

まず紹介するのは、本田晃三・佳子夫妻である。彼らは、「登り窯を保存・活用する会」の一員でもある。現在は、烏丸夷川にある「アートステージ 567」と名づけられた町屋を活動拠点としている。この町屋は、老舗の米屋のもので築 80 年も経つものだ。佐野春仁氏と学生たちによって、最近改修工事が行われたばかりである。今後は、講演会や座談会、展覧会といった催し物を行っていくそうだ。

彼らは、登り窯の保存・活用に関わる以前に、市指定有形文化財である駒井邸(現駒井家住宅)の保存・活用に十数年もの間、力を注いできた。彼らの、保存・活用へのこだわりはここにルーツがあるようだ。

駒井邸は、遺伝学の権威であった駒井卓博士の住まいとして、1927 年にウィリアム・メレル・ヴォーリズの設計により建築された。1972 年に博士が亡くなり、その後、館は駒井家縁の企業の研修保養施設として再スタートする。

佳子夫人が企業の管理人に採用され、夫婦で駒井邸に転居したのは、1986 年のことである。前の管理人と親しくなり、駒井邸に興味があったことから引き継いだと言う。もともと、美術関係の仕事をしていたご夫妻は、当時の荒れた館を復元する作業から始めた。晃三氏は、当時のことをまるで昨日のことであるかのように話してくれた。

「結構大変でねえ。すごい汚れてたし。これ、前の人の悪口を言うんじゃないんですが、なんとなく魅力があって、ここええなあ、好きやなあと思って入ったところが、汚れてたら嫌でしょ、誰でも。それと同じようなもんで、すごい気になったんですよ。で、とにかく日曜日の度に、掃除から始めて。例えば、窓枠これだけ、今日の日曜日はこれだけ磨こうとか言って。ほこりがすごい溜まって。そういう作業をとにかく時間があればずうっとやってた。それから、サンルームのところが完全に塞いであって、お布団が積み重なってたんです。そういうものを全部片付けるところから始めて、どんどん、広く綺麗にしていって。絵がひとつ飾ってあるわけじゃないし、お花ひとつあるわけじゃない。庭も結構痛んでたし。で、それを徐々に徐々に、絵を飾ったりいろんなことを始めたら、まあ何年間かするうちにきれいになっていった。」(注 3)

努力の甲斐あって、次第に社員の宿泊の予約が殺到するようになった。持ち主の企業の社長も元の美しさを取り戻した館に感動し、夫妻と社長との間には信頼関係が生まれた。そして、夫妻の中では、このすばらしい館を、企業の関係者だけでなく、一般の人とも共有したいという思いが強くなっていった。

「たまたま彼女(佳子夫人)の同級生で、安達武生ってのがいて。彼がね、石の絵を鉛筆で書くんです。彼が、今は新しいのに変わってたけど、京都大学の近くの日仏学館で個展をやったんです。で、それを観に行って、もちろんそれまで交流はあるんだけど、その作品を観たときに、ええなああって。で、半分冗談も含めてですけど、こんな駒井邸でやれたらええなああって。そしたら、ええよって話になって。でも、まず会社の許可がいるでしょ。で、宿泊もあれば研修もあるわけだし、仕事に支障があってもえらいことだから、さあどうしようってことになっちゃったんだけど。まあ、さっき言ったように、持ち主の方と信頼関係がかなり築かれてたんで、実はこんなにすばらしい絵があるんだけど、できたらお客さんたちにこの場所で絵を観てもらいたいんだ、と。この場所もすばらしい

んだし、絵もすばらしいんだし、やっぱり広く皆さんに観てもらってことをしたらいいんじゃないか、と。迷惑かけないから、仕事にも支障きたさないから、許可してもらえなかねえ、ということをお話したんです。だったら、いいよって許可が出た。

それで、展覧会をやったんです。実際、案内書なんかほとんど一通も出さなかったなあ。知り合いにお手紙で、来てねっていう範囲で始めて。一応(展覧会を)三週間ぐらいやったんですよ。いや、最初は一週間。最終的に三週間。それは延びたから。一週間、とにかくやったんだ。手紙とか電話で来てよって。そんな感じで一応やってみたんですよ。そうしたら、すごい人が来てねえ。近所の人はもちろん。近所の人実はあの場所に憧れがあって、入ったことがなかったんですって。駒井博士が別に差別してたんじゃないくて、要するに昭和天皇ですよ、その先生されているような立派な方のお家に、とても一般の市民が入れるようなもんじゃないって。そういう人の部屋に初めて入って、これでもういつ死んでもええわって話で。ちゃんとした身なりで、もう敬礼みたいな格好をして玄関に入る覚悟をして入られる。展覧会には、そういう人たちがまず来られたんですね。

今から大体二十年前って、確かに画廊とかたくさんあったんですよ、京都にも。でも、文化的にすごく高いところにあって。美術館に絵を見に行くっていうことは、まずある層の人たち以上でないと足を運ばない。画廊なんて、特別また、敷居が高くて。だから、絵を簡単に観るような生活しているかっていったら、まだまだ到達していない時代だった。でも、(駒井邸は)画廊じゃないから。普通の人が、初めて芸術作品っていうのが観ることができたのが、どうも駒井邸の、その時代だったんですね。

それで、僕らはそういう今まで美術館以外は絵を観にいくようなことがなかった人たちの、そういう時の感動を実は、毎日その期間中毎日見たわけですよ、僕らは。そうすると、意外な発見したり、どんどんどんどんみんなが変わっていくのがわかったり。そういう生の声を聞いたりっていうのが、ずうっと僕らのどっか心の、どっかにそれが染み込んだんじゃない、その時に。

駒井邸でやってたこと、登り窯でやろうとしたこと、で、今もここ(アートステージ 567)でまたやろうとしていること、どうもそのへんがキーポイントみたいですね。で、それを口ではちょっと言い難いね。そういう感動とかそういうもんは。ただ、大切なのは本物がそこにあって、普通の人たちがそれに触れて、そのまま素直に感じた部分を、我々が埋められたっていうことが一番大きかったんじゃないかな。それがずうっといまだにあるんだと思う。」(注3)

なんと魅力的な話だろう。空間の活用の理想系といってもよい。自分だけが満足するのではなく、すばらしいものはみんなで共有し、喜びを分かち合いたい。そんな、純粋な気持ちを持つことから、保存・活用の精神が生まれることもあるのだ。

その後、不景気により、企業が駒井邸を維持していくことができなくなる。しかし、夫妻はあきらめることなく、ボランティアといった形で駒井邸を運営していくこととなる。市民に開かれた文化活動も認められ、98年、駒井邸は市指定有形文化財になった。応援者の発起人会も作られ、その存在は多くの人に知れ渡っていく。2002年、駒井邸は財団法人日本ナショナルトラストに寄贈され、保存が約束された。

駒井邸を離れた後も、夫妻は場所を変え、保存・活用運動に力を注ぎ続けている。自分たちは活用運動をしているのだから、一つの運動が終わったらそれでおしまいではなく、

そこで得たものも活用していきたいのだと言う。

最後に、本田夫妻なりの活用に対するポリシーを聞いてみた。

「それぞれ(の活動は)違うように見えるんだけど、我々の中では一緒なんです。まず、歴史を感じるのは当たり前なことなんで、文化を感じるかどうか。ただ歴史があるってだけではやってないです。そこでの地域の人の関係があって、そこに生活の営みがある。そこで生まれてくるもの。そのなかで、それをどう活かせるか。」(注3)

まさに感性の人たちである。しかし、文化を残していくためには、自分の直感を信じて行動に移す勇気が一番必要なのかもしれない。

2) 御土居堀の保存・活用の場合

続いて、御土居堀の保存と活用を訴える中村武生氏を紹介したい。御土居堀とは、豊臣秀吉の天下統一後に築かれた、京都を囲む城壁のことである。「御土居」という呼び名が通例貸しているが、中村氏は、著書の中で御土居のことを「御土居堀」(注4)と呼んでいるため、ここでも御土居堀と呼ぶことにする。

御土居堀は明治10年代以降に私有が許されるようになってから破壊が進んできた。戦後になると、ますます破壊は進み、国史跡指定地ですら破壊される事態まで起こる。現在、史跡指定地になっている御土居堀は9箇所あるが、いまだに民有地のままで、買い上げ努力を聞かないところもあるという。所有者にしてみれば、税金の負担がのしかかり、迷惑な限りだ。こうした点は、登り窯の抱える悩みとも重なるところがある。

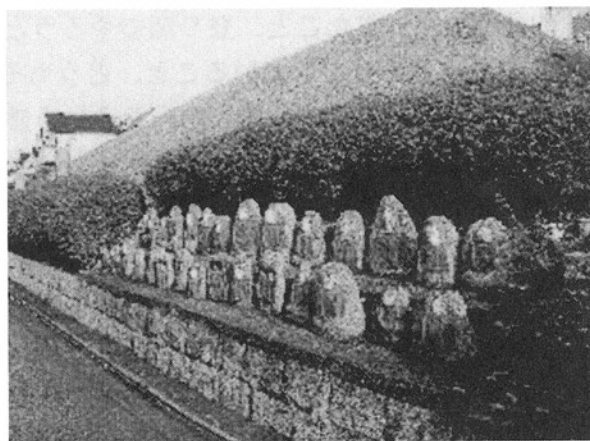
「そもそも、この活動が継続してきた最大の理由は、行政の無視です。」(注5)

中村氏が最初に口にしたのはこんな言葉だった。

「これ(御土居堀研究)の始まりも、佛教大学のすぐ近くの御土居堀が壊されてるのを、何とかありませんかって(行政に)言ったのを、あそこは史跡指定地じゃないからええんやって言われたものにカチンときて始めたことですから。」(注5)

当時、中村氏はまだ大学生だった。ここから、彼の御土居堀を守る戦いが始まる。

「僕がしたのは、とにかく論文を書くこと、論文を書いたら大事なものと分かる。大事なものと書いた論文を、毎度京都市の文化財保護課に持って行こう。そしたら、彼らは(民有地のままの御土居堀を)買い上げをしてくれるだろうと思ったんですよね。僕がものを書けるようになったのは相手が行政だったからです。僕の歩みには、(行政は)決してマイナスではありません。ただ、それでは進まんというのが分かったから、市民に訴えようと思って講演会作りをしたり、本を書く目的で新聞連載したり。」(注5)



史跡お土居堀の一部

そのような活動を継続していくことで、御土居堀が「近世・近代京都にとっていかに意義深い構築物だったか、現在何とおろそかに扱われているか」(注6)を伝えてきた。行政から無視されても諦めず、逆に、その立場だからこそできることをする、という精神には感心させられるばかりだ。

京都市北区鷹峯地区には、500メートル近くの御土居堀がある。土塁は失われている、跡地と認識でき、山林のまま残されている、非常に稀な地区である。中村氏は、現在、ここに御土居堀を復元したいのだと言う。鷹峯に多く存在する、他の遺跡とともに新たなまちづくりを考えているのだ。

「鷹峯っていうところは、京都市でありながら、旧市街地とは別の農村地区なので、大きく開発もされずに、まだ一昔前の匂いを残してるところなんです。だから、古くから住んでる人は、このまま、ここがどことも変わらない地域になることを恐れているんですよ。いろんな問題があるんですよ。たとえば通学路に歩道もなく、びゅんびゅん車が来るから危険だと通学路のことを心配する人もいる。鷹峯芸術村って一般に言われるのに、佛教大学にしても京都市にしても、光悦芸術村っていうと亀岡とか違うところに作ろうとする。なんでこの本拠地にしようとししないのか。そこに住んでいる人たちが、その地域のことを個々に心配しているんです。そういうところに僕が入り込んだものですから、一部の人間とは気があったんですよ。

個々でみんな鷹峯を心配している者がいるから結集しよう。で、より良い町を作るためにいろんなことを話そうって言って、定期的な勉強会をしようかっていうのが今計画に上がりだしたところですよ。

鷹峯の明日を考えるためにも、歴史と文化をきちんと正しく整理して、理解しようっていう動きに、今なりつつあるので、そこに僕が入っていったらと思うている。」(注5)

市民とともに、保存・活用を達成していこうとする姿勢からは学ぶことが多い。登り窯の保存・活用にも、市民の力は必要とされているのだ。そして、そこから生まれるものは、市民のためにもなるのだ。

保存・活用は決して一人の力で成し遂げられることではない。中村氏の行動からは、行政・市民・マスコミを巻き込んで、継続して活動していくことが、保存・活用の成功への近道であることを思い知らされる。

対象となるものは違えど、京都で保存・活用運動に励む団体同士が交流を深めることができれば、もっと面白いことができそうである。

V 登り窯から五条坂・京焼の未来を考えよう

1) 注目を浴びはじめた登り窯と新たな課題

さて、話を藤平陶芸の登り窯に戻そう。

「登り窯を保存する会」の働きかけやインターネットでの宣伝効果もあり、藤平の登り窯は次第にその認知度を上げている。

「一般の人でも、非常に感銘を受けるゆーか、こういうものがこんなところにあるのかと、言うてそういうのを見ていると、だんだん、これは残しておくべき十分な意義がある、残しておかなければならないという気持ちが強くなりましたね。」(注1)と、社長はうれしそうに話す。実際、社長にお話を伺っている際中に、小学生が数名、登り窯を訪れて、わあっと声をあげていた。登り窯を見に来るだけでなく、絵付けや陶芸を体験しに藤平を訪れる人も多い。かつては悩みの種であった登り窯が、今や人を呼ぶ役割を果たし、本業の製造・卸をしのぐ勢いだ。

そして、この秋、藤平陶芸は、そういった体験コースや登り窯のスペースを運営する有

限会社陶悦を新たに立ち上げた。今後は、有限会社陶悦と製造・卸の藤平陶芸有限会社という二社を同時に経営していくことになる。

「こっちから積極的に働きかけようと思って、パンフレットを作ったんですが。(陶磁器を) 作って、全国の小売店に卸すのが(藤平陶芸の) 本業ですわねえ。それ以外に、ここへ来て一般に体験させる、そういうお客さんをもっと増やしたいと思ってるわけですね。それをするのに、製造卸以外を担当する会社として有限会社陶悦ゆうのを立てたんですよ。

これからは、もう製造や卸だけでは食べていけないわけですね。これだけの広いものの固定資産税を毎年払って、いつか行き詰ってですね、これを売却しなければならぬ。売却したら煙突も登り窯も潰れてしまって、住宅が建つというのが目に見えてますから。そういうのじゃなしに、そういうものを残していこうと。

もともと、陶器やってるんやから、教えることもできる、焼くこともできる、それを利用して、ここのスペースは他には無い色んなものがあるわけですから、それを見てもらって人を寄せる。町全体も活気が出る。周辺のお店にもその潤いが一部はいくように。いま、あまりにも山の上のお土産屋とかお寺に集中してるのが、もうちょっと広がるようにとかね。この会社自体を立て直して、新規事業のほうに重点を移して、それによって古い事業のほうもうまくなって行って、というのをやっていこうとしていて、期待っていうのはものすごくありますね。」(注1)

社長は、この日一番生き生きとした表情で新しい会社について語ってくれた。実際、体験コースを申し込んでくる客は年々増えており、社長も自信に満ちあふれている時なのであろう。

しかし、そんな社長の姿をうれしく思う反面、寂しくも感じた。確かに、登り窯を維持するためには、それだけの収入が必要なのは分かる。たくさんの従業員も抱えているのだから、勝手なことはできない。しかし、製造・卸だけでは食べていけないと言い切ってしまったことに疑問を感じるのだ。今の時代、本当に製造・卸だけではやっていけないのだろうか。

どうして目を覚まさないのか、と佐野氏は警告する。

「商品開発をもっと真剣にやらなければ、どこの店も駄目になってしまう。いいものは今でもちゃんと売れる。

僕が言いたいのは、清水でも、やっぱりまだまだ皆さんすばらしい卓越した技術持っているわけじゃない。ただ、みんなそれが使われてない。だから、これをもういっぺん、意味のある集積と相乗効果を生むためには、なんか仕掛けがいる。

その仕掛けを何がやるかっていうと、やっぱりコーディネーターだと思うんだよね。アートなプロデューサー。海外の有名な焼きどころっていうのがあるよねえ。例えばマイセンとか。ブランドってのは、だいたい、コーディネーター、チーフデザイナーってのがコーディネートするんですよ。今こういうのを作れって。だけど、清水をはじめ、日本の焼き物は、作家さんや工芸士さんが、自分を持っていて、それをやらない。頑としてやらない。それが、やっぱり一番今って言う時代を考えたときマイナスになったんじゃないかな。僕らからしたら、今こういうものをみんな求めてるんだから、こういうものを作るようにがんばれ、こういうものをやれって言って作らせる。そんな風にデザインしてやらせたか

ったんだけどねえ。で、やった限りは、売り方まで考えるよね。今はね、良いものを作ったからって売れるかっていうと、なかなか売れない。もう一つは付加価値だよね。だから、期待感を持たせて、良く見せて。そして、その雰囲気と一緒に買う。みんな良いものを見て、良いものが作られてる現場にいたら、なんかやっぱりこれを記念品として買って、その良かった思い出も一緒に持って帰りたいと思うわけ。そうでしょ。それが基本だと思うんだよね。

当然、売り方見せ方、その客の入れ方、それから建物のバランスから全部、そういうものを見て、作っていく。それも一社だけじゃなくて、集積効果だから、何社かと一緒にやって、今年はこのテーマで行こう、秋の風なら秋の風というテーマで、みんなでやってみないかと、そしてみんなで切磋琢磨して、秋の風を表現して、みんなで陳列会やればいい。そしたらみんながんばっているんだから、それは絶対に、来る人も期待感を持って、くるんですよ。」(注2)

かなり実現には程遠い意見である。私には、これが一番良い方法だとは言切ることができない。作家や工芸士の立場からしてみれば良い気がしないだろう。古くから京焼に携わってきた職人たちから認められる人物がいるのなら話は別だが、そんな人がいるのなら五条坂は今のようにはなっていないはずだ。

2) 新たな五条坂を目指して

「文化ってのは、期待感と注目度が集まったうえに出来るんだよ。みんなが、良いもの作ってくれるんですねって言ったら、良いもの作らざるを得ないじゃん。そういう風になんかやるっていう力があるから良いものができるんだよ。京都が持つてくる力ってのは、そういう良いものを作らなきゃいけないっていう、都であるが故のプライドが作ってるんだよ。こっそり作ってるわけじゃないんだよ。だから、そういう風なものをもう一回やるためには、何とかして注目を浴びなきゃいかんのよ。さすが京都だって言わせる。そしたら、その期待感に負けないようにみんなががんばる。都っていうシステムは、ステージですよ。そのステージ性をみんなで消しちゃったわけよ。ステージを作ることが大事なの。そういう材料を探したときに、登り窯は、仕掛けとしては唯一じゃないかなと。それが一人だけあるんじゃないくて、あそこを中核にして河合寛次郎先生やいっぱい作家の先生がいるし、いろんな無数の工房があるんだから、これをネットワークにしてやろうって言ったら、今はなんとなくバラバラにやってるだけでしょ。せっかく観光客来そうでいいものいっぱいあるのに、みんなシャッター閉めてるじゃない。こういうところが一番駄目だよ。」(注2)

五条坂全体で、製造・卸の発展を考えた場合、やはり藤平の登り窯は無視できない存在である。製造・卸と登り窯を切り離して考えるのではなく、融合させることはできないだろうか。登り窯が人を呼ぶ力を持っていることは分かっている。これを利用しない手はない。登り窯が脚光を浴びている今だからこそ、製造に力を入れ、清水焼の魅力を伝えなくてはならないのだ。

町全体をどうにかしようという気持ちは、末広社長も同じである。

「皆を呼びかけて、五条坂盛り上げたいとは思ってるんですけど、自分ところが、利用してください言うのは、別の意味で躊躇しますね。ちょっと言いにくいですね。そういう希望があれば、できるだけの協力はしたいと思ってますけど。

京都市がするというより、やっぱりこの地元でないといかんのでしょうかね。常に、地元の声、全体が下から沸きあがってきたんなら、それはよろしいよと。そしたら、資金的な援助、有利にお金が借りられるとか、あらゆる助成策を提供してやろうと思っておられることは間違いないですわ。」(注1)

五条坂を活気付けるための準備はもう整っている。藤平の登り窯をきっかけに、五条坂が変わろうとしていることは確かだ。登り窯は、私たちに変わらなければならないということを見せてくれた。

佐野氏は、実に楽しそうに、五条坂で実現させたい夢について話してくれた。

「楽只苑もねえ、最初はあそこ全部(窯跡を)どかすために行ってみたけど、やっぱり(どかすのに)300万かかるよって。で、しかも向きこんなになって。でね、これ、ひょっとしたら、活かしたらいいんじゃないって思ったの。そして向こう見ると小川さん、竹泉さんてあるじゃない。隣にある程度形が残っている登り窯がある。(そして楽只苑側に壊れた窯もあるんだよね。)全体としてね、五条坂の作家のミュージアムだね。生きたままのね。で、僕の中で話をどんどん大きくして楽しんでるんだけど、どうせやるんだったらミュージアムにしないかって。登り窯の跡って、あれ結構きれいじゃない。あそこ(楽只苑の窯跡)に行くまでの路地もなかなか良いでしょ。あの奥にも作ってる人たちがいるじゃない。生きたまんま、あのまんま、半分観光、半分勉強になるんだから、そういうミュージアムがあっていいと思うんだよね。エコツーリズムじゃないけどさ。ミュージアムっていうと、なんかこんな大きな箱作って陳列棚に入れることしか頭に無いけど、そうじゃなくて、生きたまんま、どうぞ見てくださって。一つは登り窯の部屋の中入っていろんなことができるし、あと作家さんがいろいろやってる場面を見ることが出来るし、いっぱいあるじゃない、外からこうやってのぞけるとなかなかすばらしいものが見えたりするわけでしょ。そういうものはミュージアムだと思うんだよね。新しいミュージアムの形態がそこで可能だろうと。やりませんか？」(注2)

登り窯に、そして五条坂に触れ、少しでも興味を持った人たちが参加できるような仕掛けをどんどん作っていく必要がある。歴史や文化を学ぶことも大事だが、その先に進んで新しい活動を生み出していくことが大切だ。今回紹介した人々に賛同して、一緒に行動を起こす人が増えれば、もっと大きなことができるだろう。それは、五条坂に住む人でなくても良いのだ。そうした活動が広まれば、五条坂の人々をも動かすことができるのではないか。誰もが新たな五条坂を作ることができると私は訴える。登り窯が煙を上げていた頃の生命の輝きが、五条坂に戻ってくる日はそう遠くないはずだ。

この報告書を作成するにあたって以下の方々にお世話になりました。ありがとうございました。(五十音順・敬称)

佐野春仁 京都建築専門学校教務主任、末広直道 藤平陶芸有限会社社長、中村武生 佛教大学・花園大学・天理大学非常勤講師、本田晃三、本田佳子

(注釈一覧)

(注1) 末広直道氏ヒアリングより抜粋(2005年11月22日実施、取材者：赤尾、テープ起こし：赤尾)

- (注2) 佐野春仁氏ヒアリングより抜粋(2005年9月27日実施、取材者：赤尾・上野・松木、テープ起こし：赤尾)
- (注3) 本田晃三・本田佳子両氏ヒアリングより抜粋(2005年9月6日実施、取材者：赤尾・上野・松木、テープ起こし：赤尾・上野)
- (注4) 中村武生『御土居堀ものがたり』(京都新聞出版センター、2005年) p.8
- (注5) 中村武生氏ヒアリングより抜粋(2005年11月2日実施、取材者：赤尾・石川・小野寺、テープ起こし：赤尾)
- (注6) 中村武生『御土居堀ものがたり』(京都新聞出版センター、2005年) p.168

(参考文献)

藤岡幸二(編)『京焼百年の歩み』(京都陶磁器協会、1962年)

フォーラム駒井邸(編)『A・S・E・E・D/フォーラム駒井邸通信 第4号』(フォーラム駒井邸、2003年5月)

中村武生『御土居堀ものがたり』(京都新聞出版センター、2005年)